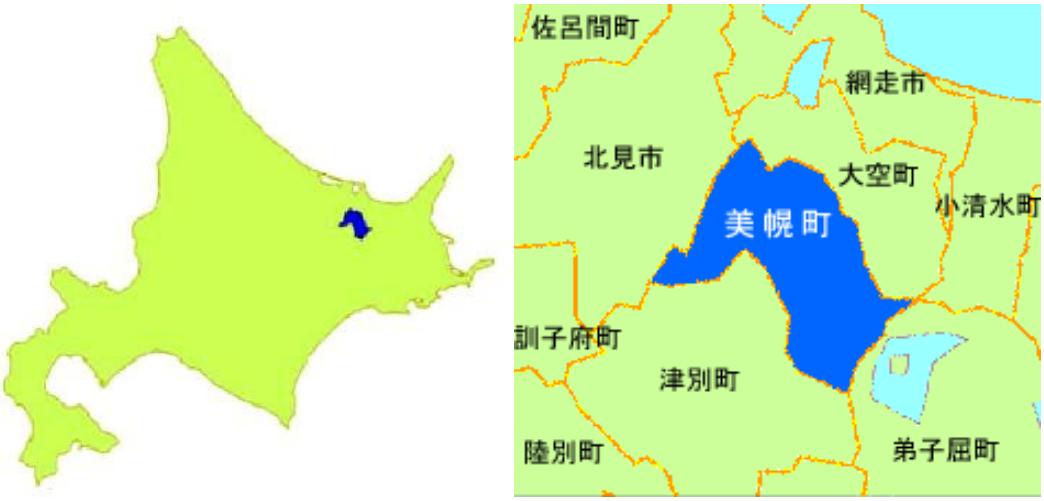
事例番号 009　高齢者コンビニ「ば・じ・る」（北海道美幌町）

1. 背景

美幌町は北海道の東部、オホーツク海岸から 30km余の内陸に位置し、オホーツク海沿岸の海洋型気候に比べ比較的温暖な気候を持つ。また、日照時間の長さは日本有数の地域である。町内には網走川、美幌川が貫流し、東南部の丘陵から穏やかに平原が連なり、地味肥沃な耕地が1万haに及ぶ。実に農業に適した地である。



美幌町の位置と美幌町周辺地図　（資料：美幌町ホームページ）

美幌町の人口は 1985（昭和 60）年がピークで、26,686 人まで増加したが、その後は出生率の低下、就労の場が少ないことによる若者の町外流出、民間事業所の業務合理化、官公庁の統廃合等による町外転出者の増加等により年々減少し、現在は 2 万 3 千人台になっている。

美幌町の商店街は 1951（昭和 26）年の陸上自衛隊の駐屯を契機に発展し、約 1.8kmの国道沿線に4つの商店街が立地しているが、現在では上記のような事情を背景に厳しい状況にある。また、本町の中心市街地では、急激なモータリゼーションや少子高齢化、郊外における大型小売店の出店などから空き店舗、空き地が増加しており、求心力が大きく低下している。

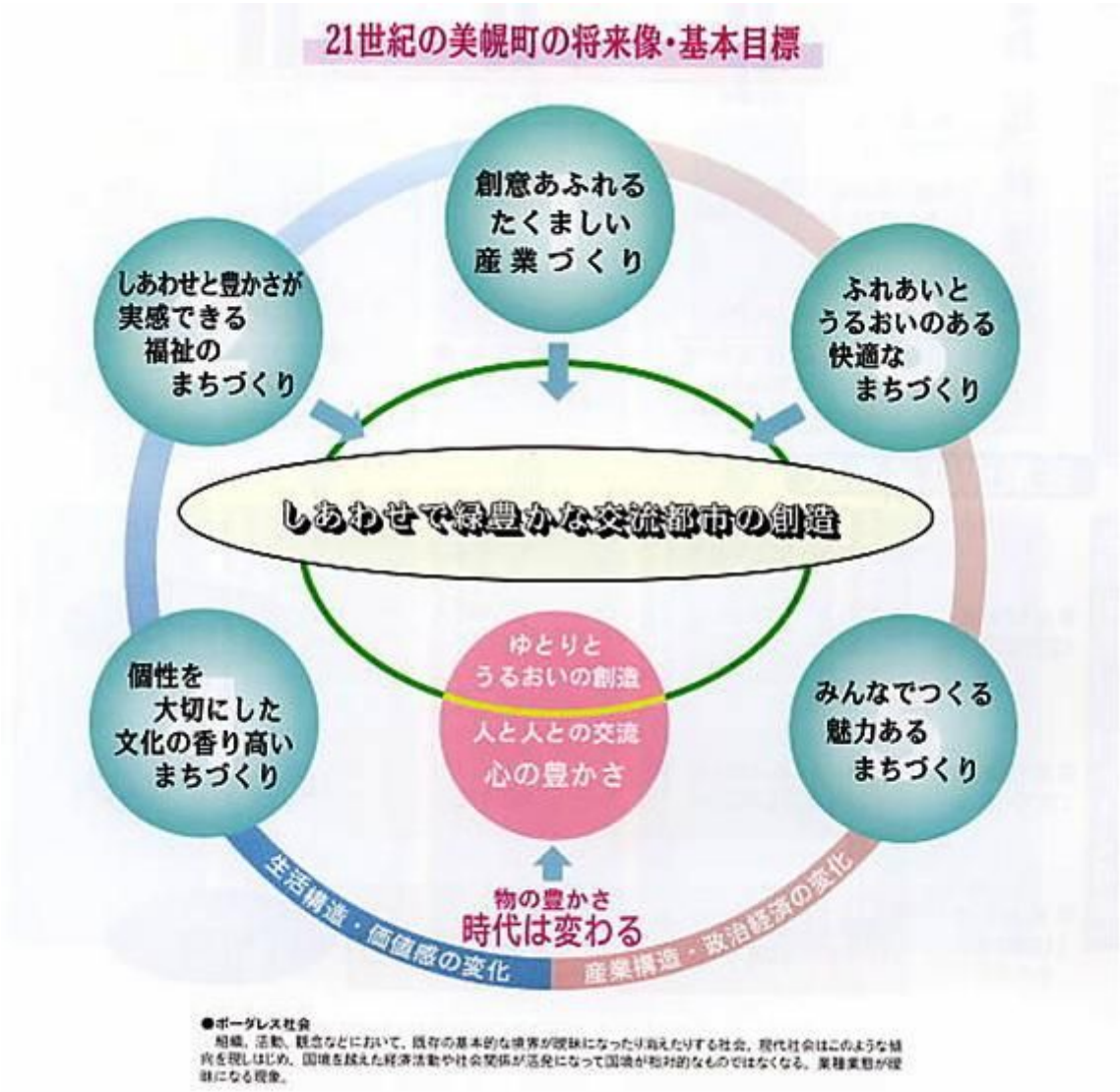
人口は 1994 年度から 2000 年度にかけて本町全体で 3.8%の減少、中心市街地全体で 10.6%の減少となった。中心市街地には公共・公益施設や事業所など多くの施設が集積しているが、近年では官公庁の統廃合や民間事業所の業務合理化（支店、営業所の撤退）等により減少傾向にある。中心市街地の商店数は 1994 年から 2002 年にかけて 77 店舗減少した（21.2%減）。

このような状況下、本町の中心市街地の核として賑わいを見せてきた大型店「美幌農協デパート」が 1993 年、郊外に移転した。それにより多くの町民にとっての憩いの場が失われてしまい、それが地域コミュニティの崩壊につながることが危惧されるようになった。それに危機感を持った商店街では、1999 年度に中小企業振興公社の、2000、2001 両年度に全国中小企業団体中央会の助成を受けて、まち再生に関する本格的な調査研究を開始した。その結果、中心市街地を再生して人々の生き生きとした生活を取り戻すためには、地域コミュニティの新たな核づくりを早急に行うことが必要であるとの共通認識が持たれるようになった。

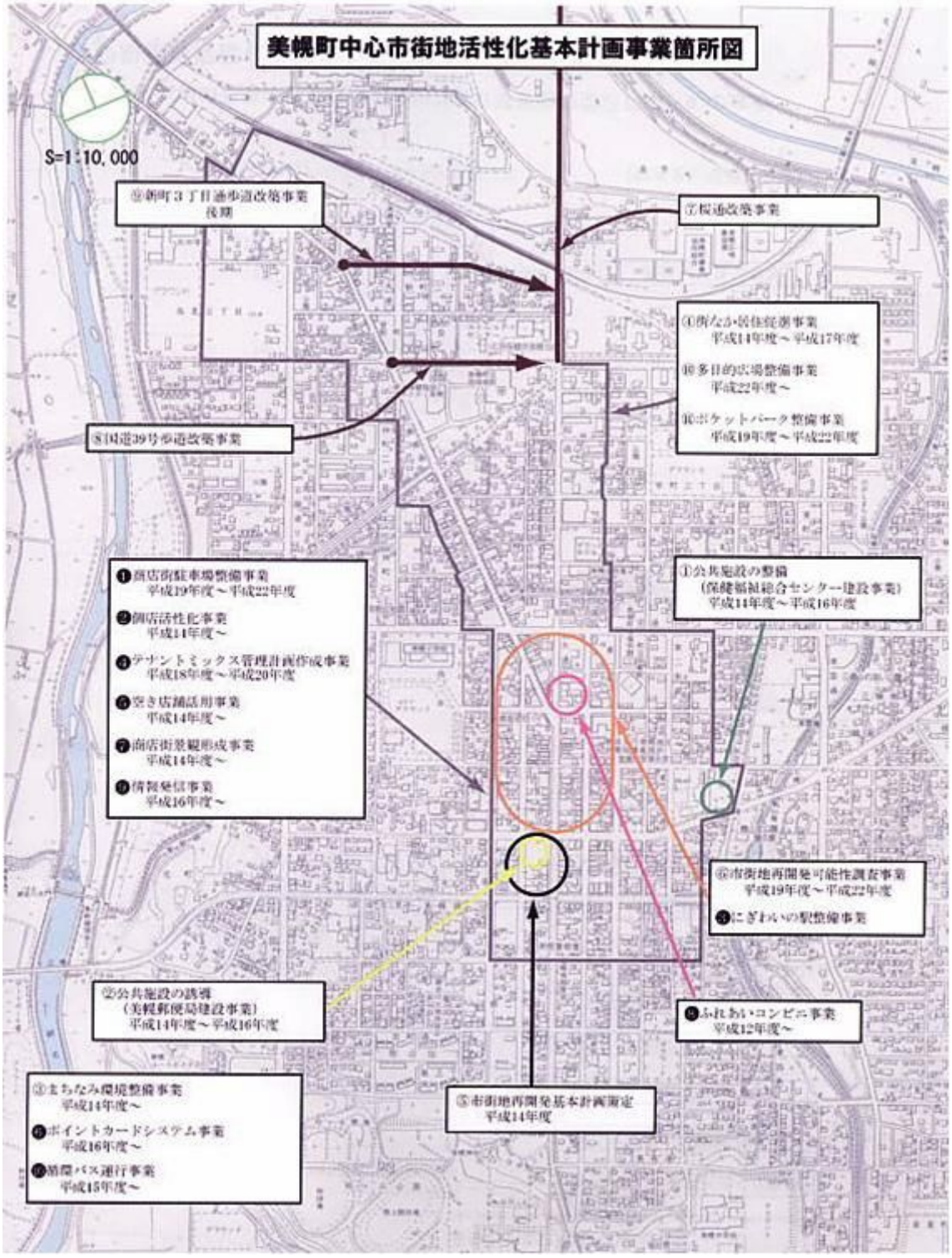
2. 目標

中心市街地活性化基本計画は、「生活環境の機能充実」、「環境負荷の少ないまちづくり」、「商業機能の充実」、「交流機能の充実」の 4 つの基本方針を立てた。これらの基本方針の下、土地利用、施設の集積度等を勘案して区域内を 6 つのゾーンに分け、町民が望むライフスタイルや生活サービス、産業、保健・医療・福祉、教育等に関して活性化の課題を明確化しつつ、それぞれが連携しながら最大の効果が生まれるように目標を定めて計画策定、事業実施に移すこととした。また、重点整備計画として、「賑わいと界隈性のある生活モール街の形成」、「商店街の集約・再編」、「街なか居住の促進」を掲げた。

一方、第 4 期美幌町総合計画は、「しあわせで緑豊かな交流都市の創造」を基本目標として掲げた。そして、その実現のためには、「人と人との交流」や「心の豊かさ」が重要であるとした（下図）。



21 世紀の将来像・基本目標 （第 4 期美幌町総合計画より）



美幌町の中心市街地活性化策 （資料：中心市街地基本計画）

3. 取り組みの体制

本稿では、上記諸目標の実現に寄与する具体策として高齢者こんびに「ば・じ・る」を紹介するが、これは商店主有志が設立した「協同組合　高齢者こんびに」が運営主体となっている。

4. 具体策

(1) 「高齢者こんびに」の開設

商店主らが「再び賑わいのある場所を取り戻すにはどうしたら良いか」について議論を繰返した。同時に、そのメンバーはミニ・イベントなど様々な「仕掛け」を行い、それらを実施する過程で生まれたアイデアが「高齢者こんびに“ば・じ・る”」のスタートにつながった。2001（平成 13）年 4 月、商店主有志 6 人が大通北 4 丁目の空き店舗を活用して店をオープンし、同年 8 月には事業の母体となる「協同組合　高齢者こんびに」を設立した。高齢者こんびに「ば・じ・る」の事業概要は以下のとおりである。

事業主体	協同組合高齢者こんびに
事業名	ふれあいコンビニ「ば・じ・る」（ばあちゃんも、じいちゃんも、るんるん楽しい）
店舗	約 60 坪の空き店舗を活用
代表者	代表理事　稲垣　淳一
運営	協同組合員 6 名、町民ボランティアサポーター約 20 名
営業日	毎週金曜日・土曜日　午前 10 時～午後 4 時

ふれあいコンビニ事業は、「商店街の中に、高齢者から子供まで多世代が集い、ふれあう、憩いの場をつくり、食の提供や商品の販売、健康相談や講習会の開催など多くの機能を持った店舗として賑わいを創出し、コミュニティづくりを推進する」という目標を掲げている。店舗は大通地区に位置し、地域の特性・個性・資源を活かして「地域密着型のコミュニケーションの広場」として、高齢者から子供までの多様な階層にふれあいと自己表現、社会参加等の場を提供している。

(2) 活動実績

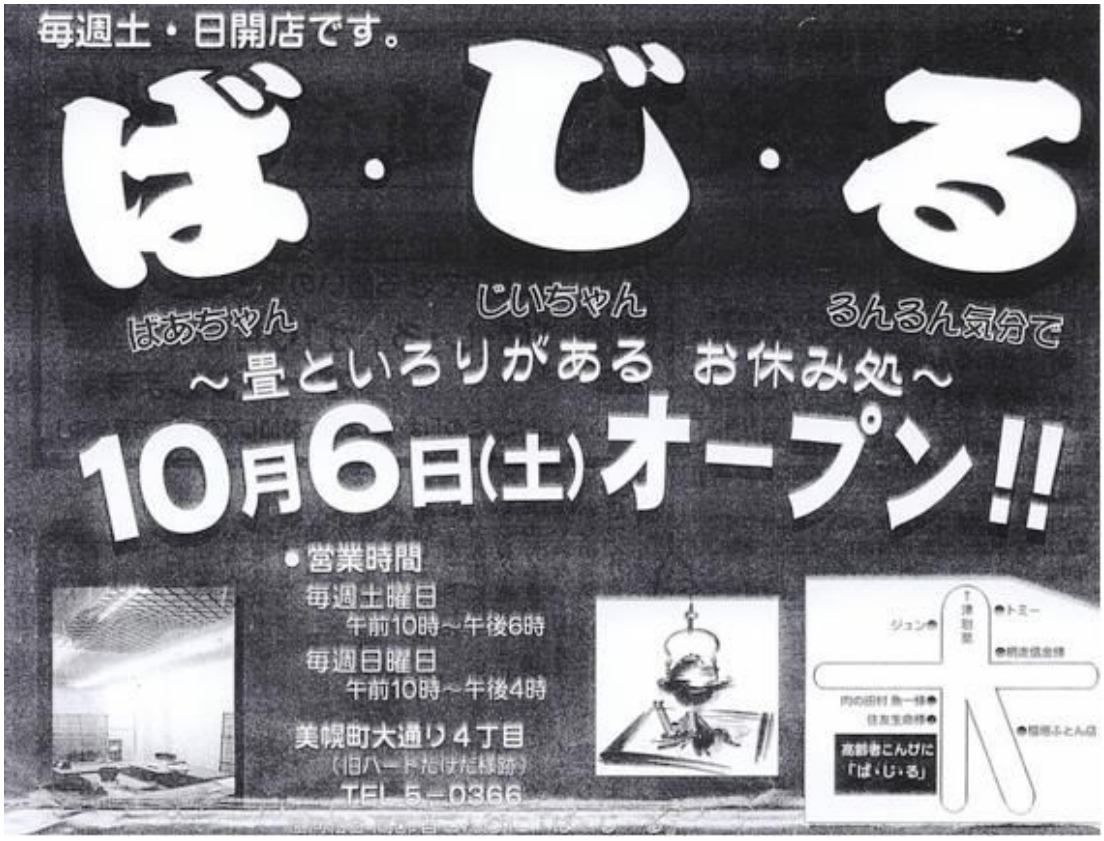
① 商品と店舗構成

リピーターを増やすために毎日の行為である飲食関係のメニューを重視し、「割安でお手ごろ感のあるメニュー」を用意することとした（そば、焼き鳥など）。物販は、組合員の取扱商品やハネモノ野菜、花、特産しじみなどを販売している。店舗の中には畳の間や囲炉裏があり、高齢者等が自由にくつろいで交流できるようになっている。

② イベント

「ば・じ・る」ではこれまで以下のイベントを実施してきている。

- 交通安全講習会、救急救命講習会／ ・ 保健士による月1回の健康相談
- 運動療法体験／ ・ 在宅介護相談窓口開設／ ・ ば・じ・る健康フェア
- 幼稚園児の絵展覧会／ ・ クリスマスケーキづくり、しめ縄づくり、わら細工体験
- 縁側サミット／ ・ 囲碁クラブ、マージャン／・ 製粉会社協力による「そば打ち」体験講習会



“ば・じ・る”のチラシ

高齢者コンビニ“ば・じ・る” （資料：美幌町）

“ば･じ･る”での食事 （資料：美幌町）

イベント活動 （資料：美幌町）

（参考） 借上げ公営住宅整備事業

美幌町では、買物、医療施設・公共施設利用等の利便性が高い中心市街地内のいわゆる「街なか居住」を促進するため、民間が建設した建物の共同住宅部分を公営住宅として町が借り上げる「美幌町中心市街地借上げ公営住宅制度」を導入した。実績は、2002（平成14）年度2棟15戸、2003（平成 15）年度 3 棟 20 戸、2004（平成 16）年度 3 棟 24 戸、2005（平成 17）年度道営住宅 30 戸（予定）となっている。

5. 特徴的手法

「ば・じ・る」が今日まで事業を継続できてきたのは、キーマン（代表理事稲垣淳一氏）のリーダシップによるところが大きい。また、軽投資で事業化しているため、利用者のニーズに柔軟に対応できている。「ば・じ・る」の支出は、家賃（約 5 万円/月）、水道光熱費、宣伝費（月毎の折込みチラシ）等で約 20 万円／月となっている。人件費に関しては、協力しているスタッフは現在のところ無報酬である。こうした条件下で収支はトントンの状態となっている。

「ば・じ・る」は、非常に工夫されたイベントやオリジナルな食のメニュー、販売する商品が利用者（特に高齢者）に大変好評であり、「町民憩いの店」としての評価が定着した。そのため、営業体制を拡充すべく、2006 年 3 月 18 日の「春のば・じ・るまつり」をもって一旦休業し、7 月に営業日を週 2 日から 5 日に増やして再オープンすることとした。当初は、店の存在やイベント等についてより広範囲へのきめ細かな情報提供の必要性が指摘されていたが、休業前には大勢が来店するなど、現在では十分な存在感を持つようになっている。

6. 課題

交流機能を拡充するためには、多世代を視野に入れつつ、特に幼児、児童への「子育て支援」事業との連携や、高齢者の技術や伝統の伝達、歴史文化の伝承の場として活用していくことも考えられる。そのためには日常的に利用してもらうことが必要であり、日曜を除く毎日の営業が理想的であるが、事業採算上は厳しい。2006 年 7 月からは週 5 日の営業となるが、店を開ける日を多くするためには収益基盤の強化が必要となる。現在は、住宅リフォームについて安全で信頼の置ける会社を紹介するコンサルタント業務で収益を上げているが、今後はこのような営利事業の拡充が課題になるかもしれない。また、ボランティアに対する何らかの報酬も検討課題になろう。行政との役割分担、協働による新たな仕組みを考慮することも必要になるかもしれない。一方、現在まで行政から人的、金銭的援助を受けずに事業を継続してきた組合員、スタッフの努力は極めて高く評価できるものであり、その自立性をいかに維持するかという視点も重要である。

（参考・引用文献）

美幌町ホームページ